練馬区基本構想審議会　第２回学習会
（新基本構想についての講演会）
講演録

平成２１年１月７日
練馬区役所本庁舎20階交流会場

講演テーマ：地域コミュニティからの自治創造
講　　師：大杉覚会長（首都大学東京教授）

■大杉会長

皆さん、こんばんは。

ただいま紹介いただきました首都大学の大杉です。審議会の会長もさせていただいております。

今、秋山先生から、大変興味深いお話を伺いました。同じ大学にいるんですけれども、なかなか、同僚の先生の話を聞くという機会はないんですね。何を研究されているかはもちろん存じ上げていますし、この間テレビでお話しになっているのも拝見したりしましたが、このようにまとまってお話を聞く機会はなかったのです。盛りだくさんの内容でしたけれども、秋山先生のお話にも出てきました道路なんですが、実は道路は、地方自治に非常に深くかかわっています。

地方自治の母国イギリスで地方自治が始まったとき、地方自治の仕事が二点ありました。一点目は救貧法といい、貧しい社会の底辺の人たちをどうしていくのかということで、医療扶助だとか、扶助制度を創っていくというものです。二点目が、この道路なんです。公共財などと言いますが、だれもが自分で率先してつくるものではないですね。自分だけが使うものではないですから、あえて自分以外の人も使えるようなものにはお金を出さないわけですね。そのような公共財を提供するのが、自治体の役割であるということで、中でも道路というのは身近な存在です。自治体が、イギリスでかつて生み出されてくる中で、医療と並んで道路の行政というのは、非常に重要な仕事としてあったのです。

本日は、「地域コミュニティからの自治創造」というテーマでお話しさせていただきます。道路の話はいたしませんが、最近よく、「まち歩き」などという形で、例えばグループで歩いて、それぞれの地区の歴史的な遺跡とか地域ゆかりのものを探そうというような、文化的、教育的、学習的な側面から見るということもあれば、子どもやお年寄りや障害のある方などから見て危ない点はないか、あるいは防犯の面で危険はないかなどをチェックしようということで、地域の中を見ていこうという取り組みをしている地域もあるかと思います。そういうふうな形で地域の中を見回っていくという機会を持たれたことはありますか。そういう取り組みは、練馬区ではありますか。

本日、私はコミュニティのお話をさせていただきますが、専門は行政学や地方自治でして、少々かたい話でいえば、行政、官僚制の中の人事とか組織の話、地方分権、都区制度、つまり東京都と23区の関係であるとか、そういう制度論のお話などもしたりしております。この地域コミュニティということに目を向けて、研究したり、現場を見て歩いたりすることになったきっかけの一つに、神奈川県大和市で、基本構想・総合計画をつくるという中の一つの柱として、市民自治区というものをつくるという構想にかかわったということがあります。

神奈川県大和市と言われても、皆さんの中でご存知ではない方もいらっしゃるかもしれませんが、人口20万ほどの都市で、駅でいいますと、中央林間という、半蔵門線を経由して東急田園都市線の終点になります。新宿からですと小田急線が通っていますし、横浜からもアクセスが良いです。練馬とはまた違いますが、ベッドタウンの地域で、毎年、人口が約２割入れかわるという地域で、新興住宅地があったり、特に近年では大規模なマンションが建ったりするような地域もあり、他方で古くからの農業などが中心の地域などもあったりします。

そういう市の中に、人口２万人規模ぐらいで、市民自治区という区域をつくって、その地域の中の、例えば自治会・町会であるとか、ＮＰＯであるとか、そういうものがお互い協力し合って、一つの区域と自治、コミュニティの自治をやっていく仕組みをつくろうということで、３年ぐらい、私がかかわらせていただいたことがあります。

残念ながら、その構想を進めていた市長が選挙で落選してしまいました。随分私は苦労して、市内の各所を回って、何で私がこんなことをしなきゃいけないのか、行政の職員がやる仕事ではないのかと思いながらも、説明会で話をしたり、自治会・町会長さんにいろいろなご意見を伺ったりしました。委員会メンバーの半数ぐらいは、自治会・町会にかかわっている方々、学校関係の方もいたのですが、そのような方々と議論を重ねて、もう条例をつくる一歩手前まで行っていた仕組みです。２年前に統一地方選挙で市長が落選されてしまって、全く違う立場の市長に変わり、その仕組みづくりは完全に無くなってしまったのです。

そういうことはあり得ることですので仕方がないのです。ただ、いち早く大和市では市民自治区という地域のコミュニティ自治の話を検討していて、そこで取り組んでいたことはホームページに全部、会議録等も掲示されたものですから、全国の自治体の方々に随分参考にしていただきました。よくヒアリングで、コミュニティ自治の仕組みを新しくつくるという、いろいろな地方に聞きに行くんですね。どのような自治体を参考にしましたかとか、何をヒントにしましたかと伺うと、私の名前までは知らなくても「大和市のです」と。「私やっていたんです」と言うんです。大和市の税金で検討した仕組みを参考にして各地でつくっている、これはいいフリーライダーですね。

市長が代わってしまい、その地域ではできませんでしたが、今回、基本構想を練馬区で作らせていただくにあたっては、この地できちんと、実効性のあるものをつくっていかなければいけないと思っております。既にご案内かと思いますが、「中間のまとめ」を取りまとめた中で示させていただいたように、この審議会のメンバーから非常に強く出てきたキーワードとして、地域コミュニティというものがありました。そ

の地域コミュニティを中心に、基本構想をまとめていこうというのが、中間段階での考え方です。残り数か月、もう３か月を切っておりますが、その中で最終的に詰めを行うわけですけれども、おそらく地域コミュニティというキーワードが全く消え去ることはあり得ないと思っております。私の今までのそうした経歴、研究歴にもかかわり、練馬区の基本構想審議会の中で示された、今の段階で非常に大きな位置づけにある地域コミュニティについて、この場でお話をさせていただければと考えております。

また、ちょっと話は変わりますが、本日、皆さんの中で、日本経済新聞をご覧になった方はいらっしゃいますか。東京の中で、都市のイメージということで、幾つかのインデックスについてのアンケート結果が載っていました。活力のある地域、今後成長が期待できる地域、文化・芸術施設が充実している地域、スポーツ活動が盛んな地域、国際性がある地域、子育てしやすい地域、高齢者が住みやすい地域、飲食店でおいしそうなものが食べられそうな地域、表に載っているのはこれだけですが、もっといろいろな調査項目があるようです。練馬区についていえば、子育てしやすい地域というので３位に入っていたのです。おめでとうございます。それ以外では一つも入っていませんでしたね。ただ、こういうのはインターネットのアンケートということもありますし、どういう基準で答えているのかということがありますので、そう気にし過ぎる必要はないんです。子育てしやすい地域だというお答えをいただいたのが11.4%なんですけれども。でも東京のまちの中でこれだけ取り上げられたというのは、それはそれで、そういうふうに見られているということは非常にいいことではないかと思います。

練馬をどういうイメージで見ていくのかということについて、皆さん自身はどういうふうに思われているのでしょう。練馬という一つのまとまりとして見ていくのか、これは、自治体ごとなんです。従って、23区でいうと区が単位となっていますし、多摩のほうでいえば、市の単位で答えてランキングされているのですが、いかがでしょうか。練馬というのは、もちろん、区としては一つですけれども、それで一つのイメージもあるでしょうし、一つの都市というものをきちんとつくっていくにしても、もう少し、我々、生活者という視点から見ていくと、いろいろな違いが出てくるところもあるのではないかと思うんです。

そういうことを考えていくときに、地域のコミュニティというのは、非常に重要な視点なのではないかと思っております。

私は、審議会の会長をしているということも確かにあるのですが、この審議会の中では一委員にしか過ぎません。ですから、私がお話ししたことがそのまま最終結論になるなどということはあり得ませんので、これからお話しすることは、あくまでも私の個人的な見解ということで、お聞きいただければと思っています。

まず、こんなふうに今までの審議会の中での議論を振り返ってみましたという話をさせていただきます。そして、審議会の議論で確認されたことと、コミュニティということを考えていくときに、「こうきょう」という視点で考えさせていただいたらどうかということを次にお話しします。「こうきょう」は平仮名で書かせていただきました。ちょっと言葉遊びっぽくて、正直好ましくないのですが、あえて「こうきょう」とし、漢字で書けば「公の共」と、「交わり響く」という言葉を当てはめさせていた

だきました。そういう視点から、少しコミュニティのあり方を考えていってはどうかと。それから、地域コミュニティと言いながらも、具体的にどういうものが地域コミュニティか、多分ここにいらっしゃる方、一人ひとりが全く違うイメージを持たれていると思います。実際に、望ましい地域コミュニティを、何が望ましいかというのも難しいのですが、つくろうとすれば、おそらくそれぞれの地域によって違うものができるのではないかと、私は思っております。　「熟慮を要する地域コミュニティのデザイン」というのは、そういうことも込めてタイトルをつけさせていただきました。おおよそこういう内容を、お話しさせていただければと思っております。

まず、審議会の議論で確認されたことですが、地域コミュニティについて、私はここで、少し定義させていただきたいのです。ここで出てくる言葉は、審議会で出てきていない言葉もあえて使っています。審議会で議論された皆さんの意見というのも、実はこういうことではないのかということで使った言葉もあるのですが、その最たるものが、「創造都市を指向している」ということです。

創造都市なんていう言葉は１回も審議会に出ておりません。あえて私が使っただけですので、くどいようですが、注意しておきます。

おそらく、審議会の中で議論されたこと、さらには審議会の前の区民懇談会のほうの、各分科会には分かれてはいたのですが、そこでの発想ともかなり共有しているんじゃないのかなと、私は思っています。審議会では最初の数回、かなり綿密に区民懇談会の報告書に基づいてそれを分析し、それから行政のほうの取り組みと突き合わせながら、考えさせていただきました。ただ、私は区民懇談会に出ておりませんので、その現場での雰囲気というのはよく分からないのですが、少なくとも審議会での議論ではこういうようなことをイメージできるんじゃないかというふうにまとめたのが、創造都市を目指す、指向するということです。

どういうことかといいますと、先ほど練馬区のイメージということで、申し上げましたが、やはり環境ですね。みどりが多い、農業、都市農業というのがあります。ただ、みどりが多いと言っていますが、「23区の中では」という意味でしかないのです。本当に多いと言っていいのかどうかというのも、私、考えてみたんです。これは今の水準でいいのですかと言っても、そう思っていないですよね。増やしたいという考え方の人のほうが多いでしょう。そういうところまで、本当にできるのか、そういうこともあるでしょうけれども。全国、大体、日本国土全体でいうと、７割ぐらいが森林なんです。日本はみどりがあるほうが当たり前なのです。練馬区の緑被率は30％近いんですね、26％ですか。緑被率の計算の仕方も幾つかあるでしょうし、緑被率って、計算しているところって少ないんですよ。普通はみどりのほうが多いですから、わざわざ計算しないんです。みどりがあまりないから計算するんですが、それは重要なことなんです。それに気がついた。23区の中では大体、今みんな計算しているのか、23区の比較はできるんです。そこで私は、ほかのところはどうなのかと調べようと思ったんですけれども、そんなの計算していないんですよ。計算しなくていいところ、もうほとんどみどりだっていうところと、都市なのに、そういうこともきちんと計算していないところがあるんです。どれだけ統一してやっているのか、私はそれが専門ではないですから、まとまったデータ持っていないだけなのかもしれないので、むしろ、

実はこうなっていると、全国はこうだというデータがあるのであれば、教えていただきたいぐらいです。それはともかくとして、この「みどり」というものを強調してやっていきたいというお考えがあるということは、よく分かりました。

ちなみに、この審議会のメンバーの中では、私は、数少ない、練馬在住者ではない委員です。行政学であるとか、専門の、そういう観点から加われということで加わったので、日々とは言いませんが、こちらにかかわるために勉強させていただいているという立場です。ですから、こういうこと知らないのか、分からないのかということであれば、ぜひ教えていただければと思います。

それから、これも私は全然知らなかったのですが、今回かかわって、皆さんがアニメというものを強調されていて、最近区のほうでも、計画や事業を始めましたね。ただこれは、23区の中でいうと、遅れて着手しているんですよね。

私も23区、ほかの区の仕事もしていますけれども、やっぱり杉並区や、区ではないですが三鷹の取り組みが進んでいるので、これからキャッチアップしていくことになろうかと思います。そのキャッチアップの仕方をどうするのか、皆さん、そこら辺でどう差がついているのか、関心ある方ってご存じでしょうか。そういう視点を持つということも非常に重要だと思うんです。でも、これからちゃんとアニメを素材にしてやっていく、そういうものがあるんだということに気がつき、これからやろうとしているということは、非常に重要だと思っています。

こうした環境であるとか、芸術、文化の側面ですね。そうしたものと我々が日々かかわってくるような、ここでは教育としか上げておりませんが、そういうテーマもそうでしょうし、それから産業という面も含めて、こういったものをどう戦略的にうまく混ぜ合わせるといいますか、組み合わせていくことによって、よりこの練馬という地域の付加価値を高めていくのか、これが今、問われているのではないかと思うんです。それによって、このまち全体を活力あるまちにしていくということだと思います。こういう議論が、審議会の中でされていたのかなというふうに私なりに考えております。委員の方々はいかがでしょうか。

これは言ってみれば、練馬区の強みの部分を活かすという発想ですよね。ただ、それをどういうふうに活かそうか、どこが本当に強みなのか、より強みを強みとして活かすにはどうしたらいいのかを考えないといけないところです。

こういう発想というのは、別に権威づけのために引き合いに出すわけではないのですけれども、日本でも最近よく紹介されていて、日本にも来られたことがある、イギリスの都市計画家のチャールズ・ランドリーのクリエイティブシティという議論があるんです。創造都市とか、日本語で訳されているのは「創造的都市」という本のタイトルでしたが、このような発想ですね。

こうした発想で地域の計画を立てている自治体もあります。また後でちょっとお話ししますけれども、典型的には横浜市です。例えば、これから重厚長大産業型の工場をつくって、それで税収を増やしましょうなんていうことは普通考えないですね。ほとんど、そういうのは無理ですよね。これは別に練馬だけの話ではなくて、よりその地域の価値を高めていくには、どういう戦略があるかというときに、横浜という大都市ですら、練馬の何倍もあるような規模のところですけれども、そういう発想を取っ

ているんです。環境や、文化的な側面とか、そういう面をどう活かして、産業とあわせて、その地域の価値を高めていくかという取り組みをしているわけです。これは別に横浜がやっているから、後追いはやめようということではなく、ここではどういう創造性を発揮するのかが、今問われている。

これは、別にある特定の都市だけではなく、多くの都市に求められている。何か一つだけやれば良いという話ではないです。芸術文化だけ、環境だけ、教育だけ充実させれば良いという話ではない。先ほどの秋山先生も、世界遺産のボルドーとか、ストラスブールを訪れられたというお話の中で、総合的にまちづくりをしているというようなお話をされていましたが、それも同じ、この文脈でとらえられる話だと思います。

かつては、大企業があればそれでやっていけるとか、何かこれだけがあればやっていけるという発想がかなり強かったと思います。そういうまちづくりは都市部もそれ以外の地域、地方、地方という言い方もおかしいですね、都心であっても地方なんですけれども、大都市部ではない地方であっても、そういう一つのものに頼っていくなんていう発想では、これからは成り立ち得ない。今持っている強みをさらに活かして、それをうまく組み合わせて、そこの中での価値をつくり出せるか、頭を使う時代になってきているということです。

これが、我々審議会の中で、議論の途中ですので、まだ十分分かりやすい形で示していない、そういうご批判はいただくかと思いますが、そういうようなことが確認されたのではないかということがまず一つです。

ですから、単に創造都市という言葉を使うという意味ではなく、そうした意味合いを込めた地域に、練馬も自覚的に変わっていかなければいけない。今までそうだったというふうに言われれば、知らないだけだと言われれば、それはそれで良いんですけれども、自覚しなければいけないということです。そうでなかったとすれば、ますます、これはきちんと考えなければいけないということだと思います。

もう一つが、地域コミュニティということになります。これはどちらかというと、練馬区の弱みだったということ、その弱みを克服して、むしろそれをさらに今度強みに変えたいという思いが、審議会の委員の間にはあります。これに関しては、強いとか弱い、弱いと言われると普通はマイナスのイメージが強いので、いやそんなことはないというふうに思われるかもしれませんが、あくまでもこれは審議会の中での議論の流れがそういうふうであったということです。この後、お話ししますが、いずれにしても、地域コミュニティをきちんと重視して、まちづくりを考えていかなければいけない。こうした議論が非常に強かった。

だからこそ基本的な考え方として地域コミュニティを挙げさせていただいたということになっています。

ただ、これは12月に各地域で開かせていただいた意見交換会や区民懇談会の委員の方々との懇談の中でも出てきたんですが、地域コミュニティって一体何なんだという話ですよね。これは正直言って、はっきりしていないところがまだあります。この言葉そのものが、何といいますか、明瞭さを欠く言葉だと、もともとそういうところもあるんですけれども、おそらく委員の方々の思いもいろいろあるのではないかと思います。それから、懇談会の報告書などを見ている中でも、地域コミュニティという言

葉を使う、使わないは別として、いろいろな意味合いで、こうしたコミュニティについて考えられておられたということが、私から見た限りでは思われました。

例えば、ここにも、ちょっと小さい字で恐縮ですが、書かせていただいております。単に我々が日常生活、暮らしを行う場だという意味での地域コミュニティというふうにとらえられている方もおそらくいらっしゃいますでしょうし、例えば行政サービスのあり方として、より身近なということが重要であると、地域に密着するということが重要だということを強調されて言われることも当然あろうかと思います。

あるいは、コミュニティというのは、例えば特によく最近、団塊の世代が退職した後、その地域に帰ってくるというようなことが言われたりしますけれども、そうした世代の人たちにとって、新しく今までの会社の組織の中での仕事とは違って、自己実現を図っていこうとして、あるいは別にそうした世代だけではなくて、いろいろな世代の方々が地域の中の活動を通して自分というものを実現させていく、そういう場としてコミュニティをとらえられている方もいらっしゃったと思います。

あるいは、先ほど歩道のバリアフリーの話とかもかかわってきますけれども、お互いの支え合い、こういったものを行う場として、公助、共助と書きましたが、特に共助のほうにかかわってきますけれども、そうした場として、地域コミュニティということを考えらえる方もいらっしゃるでしょう。あるいはここが我がふるさとですね、郷土愛と言いますか、あるいは自分の、どこか特定の、心のよりどころとして、いつでも帰れるような場所として受けとめられるような、そうしたものとして、地域コミュニティを考えている方も、いらっしゃるのではないかと思います。

どれが正しい、どれが間違っている、では今から手を挙げて決めますとか、そういうことではないですよね。ただ、これから我々が考えていくときに、地域コミュニティがいろいろな面からとらえられることはいいとしても、どうとらえていくのかということについては、もう少し議論を闘わせていただかなければいけないのかなと思っております。

ですから、皆さんのほうからも、ぜひご意見があれば、お寄せいただきたいなと思いますが、このような、いろいろな思いを出された中での議論だということから、私なりに、この地域コミュニティをどういうふうにとらえていくのか、それぞれの見方の甲乙をつけるという話ではなく、違う視点から少しお話をさせていただこうと思っている次第です。

先ほど最後のほうでお話ししたように、身近さとか、暮らしとか、ふるさととか、自己実現だとか、感情というか、情緒的な面ともかなりかかわってくるものでもあるんですけれども、今、コミュニティというのは、日本全国、どこでも何らかの形である。あると言っていいのか、あったという形になるのか、それをどう評価するかとか、とらえ方はいろいろなんですけれども、コミュニティはいろいろあるんじゃないかと思います。先ほどお話しした、大和市での取り組みから始まって、コミュニティのあり方に関心を持ち出してから、当初かかわっていたのは、どうしても東京にいるということで、東京近隣の地域だったものですから、近隣の都市部の議論を見聞きすることが多かったんです。ほかの地方へ行っても、同じように、コミュニティというのはいろいろあります。それが、どれぐらい共通性があり、どれぐらい違いがあるのか、

なかなか評価が難しいのですが、都市部のコミュニティと、それから例えば最近で言うと、よく限界集落などと呼ばれているところとは全然違うんだというと、それは違います。全くと言っていいほど違うかもしれませんけれども、共通している課題がやっぱりあるんですよね。限界集落というところも、随分私は見てきて、限界集落を研究している人とも意見交換をしたんですが、限界集落というのは、実は一番近いのが都心のコミュニティだと言われています。もちろん都心の地域というのは、周りが山とか海に囲まれているとかいう地域ではないのですが、地域の中でのつながりがなくなってくると。そして、その地域の支え手となるような人たちがいないということでいうと、実は都心の地域にかなり近い状態になっている。

典型的には、例えば商店街、ゴーストタウン化しているシャッター街は、ほとんど限界、集落とは言いませんがコミュニティですよね。そういう中で昔ながらにやっているおじいちゃん、あるいはおばあちゃんがいて、お店を何とか守り、その店の２階に住んでいるなんていうところがあって、ほかは、ほとんど全部チェーン店化していると、昼間は確かに人はいるかもしれませんが、コミュニティとしては機能していない。限界集落という言い方、私は余り好きではないので、普段は使わないのですけれども、あえて時間がない中ですので、使わせていただいておりますが、一般には、限界集落というのは人口の半数以上が高齢者になると、こういうふうになりますと、お祭りはできないどころか、葬式すらできない、冠婚葬祭、結婚するほうはそもそもいなくなってくるんですけれども、そういう状態になる地域です。地域崩壊一歩手前という状態を指して、限界集落と言ったりしますが、都心部ってそういうところがありますよね。

でも、練馬区の中ではどういう状況でしょうか。まだ、限界コミュニティというところまでいっているところはないでしょうか。でも、予備群的なところは、都心部でも、都心といっても、東京の都市中心部だけではなくて、これから確実に増えていきます。あと10年くらい、もう10年もないですかね。東京の人口は増えるかもしれませんけれども、それから確実に減っていく。高齢化率もどんどん高くなっていきます。急激に高くなります。

ただ、都心は住みやすい、インフラも整っていますから、ほかの地方からどんどん移り住んでくる人はいるかもしれませんけれども、それでも、今と同じ状態とは限りません。よく少子高齢化ということで、子どもが少ない、高齢者が多くなったということを言われますよね。もう一つ、逆に、子どもと高齢者の間の、統計上では、15歳から65歳というのが生産年齢人口と言われます。この人口はどうなっているかというと、これは東京都全体は減っているんですよね。練馬がどうかを調べていないので、皆さん、ぜひ調べてください。この間、少しケースを簡単に計算してみたんですが、47都道府県で生産年齢人口、つまり15歳から65歳の人口が、５年おきの国勢調査のデータですけれども、増え続けているのは二つの県しかないんです。滋賀県と沖縄県です。滋賀県というのは京都に近いので、今マンションがどんどん建っています。行くたびに変わっているんです。新幹線で通ったときにご覧いただくとよく分かるのですが、人口がかなり増えています。沖縄も増えているんですね。

東京都も人口全体は増えていますが、生産年齢人口は減っています。もう80年代水

準ぐらいです。全国の都道府県でいくと、今、島根県、秋田県は大体1940年代ぐらいの生産年齢人口です。当然、高齢者の数は増える。その当時と比べものにならないほど多いですよね。

子どもの数も減っています。子ども自体も当然、単にお金だけの話でいえば、コストがかかる面がありますから、生産年齢人口の部分の生産性はその当時に比べれば全然高くなっているにしても、苦しいということは変わりないでしょうね。

でも、今言ったように、生産年齢人口の部分が増えているのは二つの県しかないわけです。ほかはみんな、大体90年代前半から後半ぐらい、それがピークになって減っています。15歳から65歳、実際に、お金を稼ぎ出す世代というのは限られている。つまり、どういうことかというと、お金という基準だけでいくと、実際には20代後半、今だともう30過ぎないと、なかなか行政でいうと税金を落としてくれないとなるのでしょうが、相当、その人口層というのは手薄になってきていると思います。お金だけでいったら、これは絶対しぼんでいきます。お金以外で付加価値をつくらなくてはいけないということでもあるわけですけれども。

話があっちにいったり、こっちにいったりですが、そういう中で、どこの地域に行っても、コミュニティの問題は共通しているという話です。逆にそういう限界集落になっているところが先端的なことを考え出しているんですね。この点は後でまた見ますが、こういうことで、審議会の中で、特に地域コミュニティということを強調していくということなんですが、そのときに、どう考えていくのか。ここでは二つの「こうきょう」という観点からお話をさせていただければと思っています。

一つは、公の共のほうですね。最近は「新しい公共」とか、あるいは「新しい公共空間」という言い方がよくされるようになってきています。これはどういうことなのかというと、「新しい」とつくことは、古い公共もあるわけなんですが、実は新しい、古いというよりは、公共のあり方自体がもう一度きちんと見直されたということではないかと思います。ややもすると、これまで公共というと、イコール行政であり、官であり、というような見方がされることが多かったと思います。特に、日本語で公というと、これは昔から、権威的な、そういうようなものを指す言葉としてずっとあったわけでして、公イコール官、権力という意味合いが相当強いわけです。

でも、実際に我々が日常的に使う言葉の中でいうと、公共というのは「公共のスペース」であるとか、「公共の場」だというのは、何も官僚であるとか、行政であるとか、権威であるとか、そういうものではなくて、みんなが、だれもがそこに加わったり、場合によっては出ていくこともできるような、そういう場としてある。そういうことを、公共と言いませんでしょうか。

でも、どちらかというと、一方で公共という言葉だけ切り離して考えると、公共事業というような言葉がさっと出てくると、何となく行政、官僚というような話につながっていくことが多いのも事実です。本当の意味でのパブリック、公共というのは、だれもが出入りできるような場所のことを言うんです。ただ、日本のこの漢字というのが、また別の、官とか、権威というものと結びついているので、この訳語として本当に良かったのかということがあったのかもしれませんけれども、いろいろ誤解されてきた。そこで、あえて新しい公共ということですね。どういうことなのかというと、

練馬区では、区民であるとか、地域のさまざまな町会、自治会をはじめとする団体であるとか、ＮＰＯやボランティア、それから企業などを含めた事業者、こういった各主体がそれぞれの地域資源だと。資源というと、天然ガス、石油などを思い浮かべますが、そうではなくて、知恵や時間、情報、労働、それからもちろんお金もです。例えば、いろいろな専門的な仕事をされている人であれば、いろんな知恵があったり、情報があります。行政であれば、地域のことを考えるのであれば、いろいろな補助金などで資金提供していきましょうとか、先ほど言ったような団塊の世代の方々がリタイアした後、地域で何かしたいというときには、現役のときに培ったノウハウもあるでしょうし、それなりに資産がある人はそれもあるでしょうし、また何といっても、時間もあるとかですね。ないという人もいらっしゃるかもしれませんが、自分が持っている、そういうようなものをお互い出し合いましょうと。だれもが完璧に持っているというのはもうなくなりましたね。行政の人が言いわけめいて、「これから行政ではできませんので、皆さん何とかしてください」というのは、半分は嘘じゃないのです。本当にお金がなくなってきているんです。ただ、全国で状況に違いがありますけれども、練馬区はまだ全国の水準で見れば恵まれたほうです。とはいっても、苦しくなってきているのは間違いないわけでして、すべて、だれかが、例えばかつてのような大金持ちがいて、王侯貴族がドーンと街を全部つくってしまうなんていう、そんな時代はとうの昔に終わっているわけですし、それに代わって行政が出てきたけれども、行政ができる範囲がかなり変わってきている。では大企業がやればいいのかというと、それだってできなくなってきています。

みんな、お互いそれぞれ、もちろん同じ力を出しましょうというのは無理にしても、自分が持っているもの、お互い何が提供できるのかということを考えて、それを持ち寄って社会全体を良くしていきましょうよと。先ほどの秋山先生の言葉で言えば利他主義ということにつながると思います。ほかに博愛という言葉もよく使っていたんですけれども、アルトゥルイズムとか、そのような言葉で言われるものです。利他的という言葉もそうですし、ただ利他だけでなくても良いと思うんです。自分にとってもプラスになることで良いと思うんです。でも、それも、ほかの人たちにとってもプラスになるんだということでかかわっていく、それが公共なのです。公だから、私と完全に対立するのかというと、公私混同という言葉がありますが、私と公って対立する言葉で使われることもありますが、実は必ずしも対立する概念だけではありません。パブリック、公共という言葉も、かつて哲学者のカントが、公共というのは、「私」がいろいろかかわっていくところだというふうに言っているのです。それぞれの「私」がかかわっていく場なのです。それが本当の公共なのです。

ただ、その「私」といっても、行政というのも一つの「私」というとちょっと語弊があるかもしれませんが、それぞれの立場を持ってかかわっていく場、これが公共だということです。こうした新しい公共というものをきちんと考えていかなくてはいけません。これが、例えば皆さんの日々の生活の中でいえば、ここにあるような安全・安心とか、子どもの見守りとか、まちづくりの話であるとか、そういう中で、自分だけではできないし、だれかほかの人がやってくれるわけでもないので、「みんなで」という発想が出てきているところです。

そうしたときに、コミュニティの話とどうつながるのかということですが、今つくっている基本構想もそうですが、当然練馬区全体にかかわってくることです。練馬区全体が、都市、自治体という全域が一つの公共空間でもあるわけです。でも、全部としてとらえるだけで本当にいいのかどうか、ここが問われてくるところです。やはり、それぞれの地域、地域コミュニティという部分的な公共空間、このこともちゃんと考えていかなくてはいけないのではないでしょうか。

おそらく今まで審議会で議論している中でも、こういう言葉を使ってはいませんが、みんなの思いはこういうところにあったのではないのかなと。それならば、これからの課題にもなってくるし、皆さんにもお考えいただきたいところなのですが、練馬区という全体の公共空間と、部分的にある地域コミュニティとの関係って、どうしたらいいんだろうか、これが大きなテーマだと思います。課題だけ言って、答えを出さないというのはずるいかもしれませんが、私としましては、答えは一つだけではないと思っています。

先に、もう一つのほうの話をしたいと思います。もう一つの「こうきょう」、こちらの「交響」という言葉ですが、これは交響曲、音楽の言葉としてよく使うかもしれません。こうした議論の中での交響という言葉、もしかしたらある種の社会科学の勉強をしている中で、このような言葉を使っているということをご存じの方がいらっしゃるかもしれませんけれども、それを前提にはしません。ちょっと、言葉遊びふうに、さっき、「公共」と「交響」をかけましたが、もう一つ言葉遊びをついでにさせていただいて、「きょうそう」という言葉を使いました。「競争」から「響創」へというふうにさせていただいたのですが、やや今まで競争が過剰にあり過ぎたのではないかという反省がなされているところがあろうかと思います。私自身は競争というのを否定するつもりは全然ありませんので、いろいろの立場の方がいらっしゃるかもしれませんが、過剰に競争がある社会というのはやっぱり健全ではなかったのかな、そういう反省が出てきているのではないでしょうか。

今問われているのは、競争をなくせという話ではなく、お互いが何かしのぎを削って、生きるか死ぬか、勝ち負けということではなくて、それぞれ一人ひとり、きちんと個人を尊重したうえで、それぞれの価値観とか立場、その違い、多様性というのを認め合う、お互い響き合ってそこから何か新たなものをつくっていく。情報の共有とか、コミュニケーションの促進、こういうものをきちんと図ったうえで、先ほどの創造都市というものに結びつけていけるような、そうした関係、それを響創多様社会と言わせていただきますが、そういう方向に変えていくということが、非常に強く求められているのではないだろうかと。

お互いに響き合うということは、違う響きをお互いが持っていることを前提としていますし、響いたものが一方的に垂れ流されるのではなく、お互い響き合わなければいけないのです。共鳴板というものをつくらなければいけないですね。そういう場をどうするのかが問われることになります。それを、単に一つ一つの音だけでやれば単純な音かもしれないですが、交響曲のように奏で上げていく。時には、不協和音が生ずることもあるかもしれません。これは人間ですから、コミュニティの話をすると、きれいごとじゃないかというふうに言われるかと思いますが、きれいごとの話ではな

いのです。どろどろとした話、人間関係ですから、愛し合ったり、仲よくしたりということもありますが、憎み合ったりすることも当然ある、こういう世界なのです。そこから、単に感情だけの世界ではないものをどうつくるべきかということが、求められているわけです。今我々が地域コミュニティを考えるのは、そうした共鳴板というものがきっちりあるような一つの単位をつくろうということではないのかというふうに思います。

自分が何か発したとしても、それが相手に伝わらない、一方的にさっと消えていくだけ。こういう社会であっては、社会の中で、それぞれの存在、個々ばらばら、個人として尊重というよりは個々ばらばらだけの社会になってしまいます。先ほど言った限界集落というのはそうです。もう、みんな各集落、一つ一つの家に一人一人、おじいちゃん、おばあちゃんが住んでいるだけ。よくて夫婦で住んでいる。あとはみんな一人で住んでいる。そこでもう人生最後、終わるまで暮らしていくということになっています。都心でも絶対こういう状況が出てくる。既に、いろいろなマンションの中でとか、そういうようなところでも起きてきている、地域でも起きてきていますけれども、そうしたなかできちんと響き合う、共鳴し合う関係というものをどうつくっていくのかということが求められているのではないかと思います。

競争というのを出したのは、実はもう一つ、先ほど創造都市という言葉を使ってまちづくりを進めている横浜市と張り合うつもりはないのですが、横浜市も実は共創という言葉を使っています。共創の「共」は先ほどの、こちらの共を使っていますね。「共に創る」共創を意味しています。それはそれで非常にいい言葉ではないかなと思いますけれども、交響とか、響創とか言いながら、「響く」という字、こういう難しい字は大体好まれないので、これがそのまま基本構想に載ることはありませんから、どうぞご安心ください。「ひびく」というふうに、平仮名にするか、あるいは全く跡形もなく、なくなる、この場だけの話。ただ、私としては思い、こういう考え方というのが必要ではないのか、こういう装置をどこかできっちりつくるのが、基本構想、そしてそれを具体化していくのが基本計画、総合計画だと思っています。イメージだけ先行の話かもしれませんけれども、どういうふうに具体化するのかということを考えていかなければいけないと思っています。

実際、どうデザインしていくのか、これは非常に難しい話です。一つは地域コミュニティという、先ほどの部分的な公共空間だけですべて語るということは、私はやはりできないと思うんです。あくまでも全体の、練馬区全体という公共空間と、部分的な地域コミュニティという空間、この両方をどうしっかり関連づけていくかということが重要だと思います。

ただ、練馬区全体の公共空間、それも創造都市というようなものとして、きちんと位置づけていくためには、まずしっかり足場となる地域コミュニティ、地域の中で共鳴し合えるような関係がなければ、無理なのではないでしょうか。70万都市で、いきなり練馬区全体にお互いに響き合う関係をつくる、こんなことができますか。

先ほどお話しした、私が最初に基本構想に取りかかった大和市では、都市部で人口が多いから市民自治区をつくりますということでした。練馬区は70万人でしょう。大和市は20万。それで10ほど市民自治区つくって一つの単位当たり２万人ぐらいにする

と。でも、２万でも多いな、２万じゃ顔が分からないなと。実はコミュニティってそういう感じのものなんですね。

といっても、細分化してつくっていくわけにも、なかなかいかないというのもあります。どれくらいのものを地域コミュニティというかというのも、全然違っています。これもまた、いろいろなところで私はかかわっていて、大和市もそうですし、今もある別の全然違う地域でも、２万人弱ほどの地域のコミュニティの話にもちょっとかかわっていて、青森のほうでやっているんですけれども、集まってきた人たちは、みんなイメージが違いますから、どれくらいの単位でやるか、これくらいの規模だとか、自治会とか町会があるだろうとか、学校区があるだろうとか、もっとこういうくくりがあるだろうとか。でも、その中でもこの地域には実は自治会・町会がないとか、学校区といっても最近その辺は変わったとか、いろいろあるわけです。

ではどれに合わせるのか、これが日本人の悪いところです。その最たるものが行政で、そういう発想をしがちなのですが、みんな均一にしたがる。均一ではなくても、私はいいと思うのですが、いかがでしょうか。この地域コミュニティというものが、すべてではないにしても、ここをステップにきちんと考えていくという要素は、しっかり、今回基本構想に入れるべきではないのかと私は思っています。

ただ、すべてを制度設計も含めてやるということは不可能です。これは、数か月でやるような話ではないので、私は、まず基本構想との関連でいえば、地域コミュニティに関する検討の場をきちんと設けて、本腰を据えた議論を行う、これを基本構想の中に確約すべきではないかというふうに思っています。

例えば、２、３年の期限を設けて、検討会議のようなものを設置してきちんと議論をしてもらう。実際、今の地域のコミュニティを担っている自治会、町会の方々、また、いろいろな施設を中心にして、地域のコミュニティづくりをされている方々もいれば、これから何かしたいと思っている方々がいるでしょうから、そういう方々も含めて意見が反映されるような場をつくるべきではないかなと。あくまでも、これは私個人の意見ですので、これがそのまま載るなんていうことは、あるかもしれないし、ないかもしれませんので、誤解のないようにしていただきたいと思うのですが、こういう場をきちんと考えても良いのではないのかと。

といいますのも、今回、基本構想を30年ぶりに改定するのです。30年間よく前の構想を持ってきたなという思いもあるのですが、これは意味があるんです。なぜ30年なのかというと、実は前の構想をつくった昭和52年というのは、昭和50年に地方自治法の改正がありまして、区長を公選、つまり直接区民が選挙で選べるようになった後です。実際、練馬区は選挙を行ったのが、すぐでしたよね。50年に、練馬区がいろいろ進めていたので、法改正したという話もありましたね。それまで練馬区というのは、言ってみれば東京都の一部の内部的な組織にしか過ぎなかったと言っても過言ではないです。そこが初めて、本当の自治体として成り立ったのが、その昭和50年の地方自治法改正です。自らの代表者を選ぶ、自分たちで選ぶことができるようになった。もちろん、議会は前からあります。

もう一つ、ちょっと時間はあきましたものの、平成10年にやはり地方自治法の改正があって、12年に施行されたんですが、特別区、23区が、法律上基礎的な地方公共団

体ということになりました。先ほど申し上げたように、昭和50年に区長を選べるようになったのですが、法律上は、普通の市町村とは違う位置付けでした。普通日本の地方自治は、２層制と言われています。広域の自治体と基礎的な自治体とに分かれています。広域というのは都道府県です。基礎的な自治体というのは市町村です。

実は、平成12年まではこの地域の基礎的な自治体はどこだったかというと、東京都です。東京都は例外的に広域の自治体と基礎的な自治体を兼ねていたんです。実質、昭和50年の法改正で、練馬区がほぼ基礎的な自治体といってもいいぐらい、一般の市と変わらない権限は持つようになっていたのですが、法律上きちんと位置づけられたのは平成12年です。

今、分権改革が進められていますが、その中では、都道府県も市町村も含めて、もちろん特別区も含めてですけれども、自治体のことを「地方政府」と言っています。政府なんです。日本には国の政府と地方の政府があるんです。国家というのは、日本国家ということになるのかもしれません。国際社会の中で日本国というのがあるわけですが、政府というのは、中央にある国の政府と、地方にある地方政府から成っているのです。そういう政府の体系があるわけです。

そのことを明確にしたわけですが、そうした中でいうと、練馬区というのも、地方政府であり、中でも「住民に最も身近な地方政府」だということです。ここで、住民に最も身近な地方政府をどうしていくのかということが非常に問われてくるわけです。

練馬区は人口が70万です。最近ですと合併した自治体であれば政令市になれる人口規模です。70万人もいると、大きな権限を持ちます。ほぼ普通の一般の県と同じぐらいの権限を持つのです。しかし、練馬区は都区制度のもとにあってそうなっていません。それどころか、一般の市が本来やっているような仕事の一部も東京都がやっております。

でも、そうした限られた中でも、自治というのはきちんとできるはずです。それと同時に、最も身近な自治体だからこそ、地域と住民に身近だという強みを活かさないといけない。そのためには、都市内分権として、70万人もいる練馬区の中をどういうふうに考えていくのか。今、国全体の分権をやっていますが、練馬区の中の分権ということも考えていくべきだろうと思います。その仕方はいろいろあります。

もう時間がないので、細かくお話ししませんが、よく23区の中でも、港区とか世田谷区のように、総合支所のような大きな事務所を作って拠点にして、都市内分権をやるというのもあれば、自治会や町会を中心とした地域団体を活用して都市内分権を進めようという仕方もあります。

あるいは、かつて、今も全くないわけではありませんが、中野区や世田谷区、それから三鷹市では、地域のコミュニティ運動型と言っていますが、コミュニティセンター、略してコミセンとか、住区を単位として運動的にやっている。

今回もいろいろな説明会のときに、私が出た２回とも、それぞれ違う方がご発言されたのではないかと思うんですが、福祉関係の施設とか、そういう施設を拠点に自治的な取り組みをしていますというお話を聞きました。そういうものも言ってみれば一種のコミュニティ運動型かと思います。

どういうタイプのものを進めていくかというのは、いろいろあり得るのです。これ

からの時代、おそらく大きな事務所をつくって何十億かけるというのは無理です。これは選択肢としては余りなくなってくるかもしれません。今あるものを使ってどこまでできるかということはあると思いますが、どれかやらなければいけないということはありません。

自治会、町会、今までのものがあって、そうしたものを中心としたコミュニティがあって良いし、別のタイプのものもあっても良いし、先ほども言いましたが、行政は大体どれも全部区割りして同じぐらいの単位にして、公平にするという考え方です。公平性も重要なんですけれども、その地域で自分たちの自治をつくろうとしている人たちが、これぐらいでやろうという思い、そちらのほうがまず優先されるべきことであって、いろいろ、幅広く議論をしていくことが重要ではないかと思っています。

今、港区の話をしましたが、ここは都心区で、幸いバブル前に計画していた建て替えもあって、立派な支所をどんどんどんとつくったところです。それは余り真似する必要はないのですが、こちらでも基本計画をつくっていますが、各地区の計画などをつくるようにしたのです。これは、別に港区だけではありません。たまたま私は、今仕事でかかわりがあるので、ご紹介しただけですけれども、基本構想のレベルでは地区計画を普通はつくりませんが、基本計画とか、そういうレベルですと、地区版の計画をつくるということも随分と出てきています。もしかしたら、個別の計画の中でもそういうものをつくられているところ、練馬区の中でもあるかもしれません。

今回つくる基本計画の中に、これを今から盛り込むのは時間的にかなり厳しいかなと思っていますが、少なくとも５年後には改定されるでしょうから、今後に向けて、それぞれの地域の中で自分たちでしっかりした計画をつくって、自分たちの地域のことを考えていきたいという動きができてくれば、こういうこともあり得るということです。

港区の場合はやや上から決めてやってきているというところありますが、いろんな方々が参加して、地区計画を今つくろうとして頑張っています。私も昔、港区に住んでいたことがあって、そういう動きなどもよく知っているのですが、このようなことも少し考えても良いのかなと思っています。

今後の検討に向けてということでは、ここのところ随分いろんな大きな変化ありますね。もう10年後どころか、１年後のことも予測がつきません。ちょっと前まで原油価格が上がって、燃料費が上がって大変だと聞きましたけれども、今ガソリン代だって、もとに戻ったどころか安くなっているぐらいになっていますね。良いほうにも、悪いほうにもいろいろ変わるかと思います。そうした中で、この基本構想、総合計画というものが、10年先のことを考えてできるのか、不安を持たれている方もいらっしゃると思いますが、だからこそ今やっておくことがあると私は思います。

不確実な時代だからこそ、よりどころが必要だと思うのです。そのよりどころを何に求めるか、何となく、あいまいな言葉とかではなくて、資料では勇気と希望とか、信頼と納得とか、響き合いとか支え合いとか書きました。言葉で言えばこういう言葉に、何となくすがりたくなるのですが、これを形にしようという、それが必要ではないかと思うんです。きちんとした地に足のついた小さな自治の場として、地域コミュニティをつくるのが、こういうことを実現する上での一つのあり方なのかなと思いま

す。
　いつでも、ここの地域コミュニティに帰って、そこをまたバネにいろいろなことが考えられる、そういうような地域社会をつくっていくということも、今後、あり方として重要なのではないかと。これは、実は練馬だけではなくて、表現は違いますが、いろいろな地域でこういうことを考えていて、取り組み始めています。
　これを練馬でも、どう考えるのか。あり方はまだいろいろあると思いますので、ぜひ皆さんの知恵をお借りして、考え方をまとめていく。単に考え方を基本構想としてまとめるだけではなくて、実行しながら考え、また新たにつくり出していくということも必要かと思っています。これは計画をつくって、紙の上に印刷すればお終いの話ではありません。むしろ、その後のほうが重要だと思っていますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。
　時間ぴったりにしゃべってしまって、大変申し訳ありません。延長すると良くないのかもしれませんけれども、一応私の話はここまでということで、ご清聴どうもありがとうございました。（拍手）

＜質疑＞
■参加者
　石神井には練馬の古層ともいうべき有力な住民が住んでいます。石神井公園駅の地下道ができた際に、署名活動を行ったのはボランティアであるが、お披露目会に呼ばれたのは古層の町内会長さんたちだけでした。こうした古層とどう付き合うのか、古層の方々はファーストネームで呼ばれ、名字で呼ばれるのは新しい層の人です。コミュニティをつくる前に、基本構想でこの問題を突破する提案をしていただきたいのです。練馬区の問題として、審議会で議論していただきたい。
　現区長が提唱しているコラボレーション、協働という言葉を定着させるべきです。
■大杉会長
　審議会で地域コミュニティを議論している理由も、同じ問題意識からです。地域によって現れ方は違いますけれども、新住民、旧住民という言い方で、同様の問題はどの地域でも起こっています。
　ただし、誰かが突破して粉砕すれば良いという話ではなく、きちんと問題として認識することが重要です。最初はうまくいきませんが、きちんとコミュニケーションをとり続け、100年でも200年でもうまくいくまで取り組めば良いのではないでしょうか。ほんの数年で済ます話ではないと思います。自分の世代だけでなく、向こうも何世代もあり、もう関わらないという人も出てくると思います。地域のあり方はいろいろあります。
　先ほどのお披露目会に呼ばれなかったという話は、呼ばない側がおかしいですね。地域の顔を立てて、古株を呼ぶということはあるかもしれませんが、実際に動いた人を呼ばないというのは、地域に根ざしていない企業側の問題です。企業も考え方を変えていく必要があります。
　昔からの人たちを相手にしては駄目ということではないです。それぞれ地域の中で立場があり、考え方の違いから対立することはあります。違う中でも一緒にやってい

ける部分はどこなのか、探していくことが地域コミュニティのあり方だと思います。最初からすぐ解決するというのは難しいです。

地域の中だけでやっていても解決できないのであれば、他の地域の人はどう考えますか、という場をつくっていくことも重要です。練馬全体の中で、他の地域の方に、例えば、石神井の状況をどう思われますか、と議論してもらい、問題として浮き彫りにすることが重要だと思います。答えをすぐに求めようとしても、求められる問題ではないと思います。審議会でも、問題として認識していますが、解決策がすぐには出てこないと思っているからこそ、地道に取り組む必要があると思っています。

「中間のまとめ」では、協働、参加という言葉を使いませんでしたが、参加、協働という言葉は非常に重要だと思っています。コミュニティを考えていくときの基本的な考え方になるところなので、今後入れたいと思っています。

■参加者

インターネットやミクシィなど、講演資料にあった四つの分類に当てはまらないコミュニティもあるのではないでしょうか。地域に限らず、一気に練馬区全部や全国に広めていけるコミュニティの方法もあります。

■大杉会長

審議会で議論しているときは、コミュニティと呼んでいましたが、「中間のまとめ」の際には、「地域」をつけ、地域コミュニティとしました。ご指摘の通り、地域に根差さないコミュニティもありますが、この審議会の中で強調されたのは、地域コミュニティだったということです。今回は地域コミュニティに絞りたいという審議会の意向が強かったのでコミュニティを「地域コミュニティ」に絞り込みました。今言われたコミュニティが重要ではないと思っているわけではなく、この基本構想をつくるうえでは、あまりいくつもコミュニティを並べたくないということで絞りました。

■参加者

地域コミュニティとの役割分担があります。障害者・高齢者は独自にコミュニティを持っています。独自コミュニティの活用も含めて、検討する余地はあるのではないでしょうか。

■大杉会長

福祉施設を中心にして地域との自治的なコミュニティを形成している事例を区民との意見交換会でお聞きし、そういう間のネットワークをつくっていくことも重要というお話をしました。それをどこまで基本構想に書くかは考えなければいけないところです。講演資料はあくまで類型のため、抜け落ちている点もあります。